

「英語文学」の授業展開一考察 —『リア王』を事例として—

佐々木 隆

プロローグ

筆者はこれまで卒業要件科目であり、教職課程の科目でもある「英米文学史」を2004年以来担当してきた。それ以前は英文学概論を担当していた。しかし、2019年度より教職課程の再課程認定に伴い、「英米文学史」はこれまでの「教科に関する科目」の位置付けから、「教科及び教科の指導法に関する科目」の位置付けに変わり、区分名も「英語文学」となった。

筆者は教授法の一例として『ロミオとジュリエット』に関してリアクションペーパーを活用した報告⁽¹⁾を行ったが、本稿では『リア王』に関する報告を行う。

1 英語文学のシラバスと『リア王』の取り扱い

英語文学を扱う授業科目名「英米文学史」(2019年度より「英語文学」)のシラバス(2018年度)で、『リア王』及び本稿の内容と関係の深いものを抜き出すと以下の通りとなる。

- 2 英語文学とは何か／英米文学の特徴
ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞をめぐって
- 3 イギリス文学1：イギリス文学史とイギリス文化の概要
作品中の名句等の英語表現等を含む
イギリス文学と映画
カズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞を巡って
- 5 イギリス文学3：シェイクスピアについて

作品と名せりふ、そしてテーマ

7 イギリス文学5：シェイクスピア『リア王』

3人娘と老王：財産分与を巡って

15 英米文学を中心にした英語文学のまとめ

文学とは何か／文学形式について／英語で書かれた文学作品

「英米文学史」の各回のシラバス（授業計画）のそれぞれの意図は次の通りである。

2 英語文学とは何か／英米文学の特徴

ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞をめぐって

→ 授業の第2回目ということから概観的な内容である。ここでは特にボブ・ディランがノーベル文学賞受賞スピーチでシェイクスピアについて触れていることを紹介。⁽²⁾

3 イギリス文学1：イギリス文学史とイギリス文化の概要

作品中の名句等の英語表現等を含む

イギリス文学と映画

カズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞を巡って

→ エリザベス朝の特徴、科学と文学の関係などに触れながら、シェイクスピアの時代がどのような時代であったのかも観点に触れた。

5 イギリス文学3：シェイクスピアについて

作品と名せりふ、そしてテーマ

→ ネット配信型の教科書を中心にシェイクスピアの生涯やおもな作品の台詞を紹介した。ここでは『リア王』ではなく、「外見と実体」(Appearance and Reality)の大きなテーマに触れるために、『ヴェニスの商人』より「3つの箱選び」の台詞などを特に紹介した。

7 イギリス文学5：シェイクスピア『リア王』

3人娘と老王：財産分与を巡って

→ 『リア王』の冒頭部分を原文と翻訳を示しながら、リア王と3人の娘の場面を紹介し、その後4つの同じ場面の4つの映像を見せ、リアクションペーパーを利用してコメントを書いてもらった。

15 英米文学を中心にした英語文学のまとめ

文学とは何か／文学形式について／英語で書かれた文学作品

→ 文学の芸術の中の一つの形式であることを明らかにし、芸術の本質が「ミメーシス」(模倣)であることを示した。では何を模倣しているのか？文学の場合にはそれが「人生」である場合が多いことを明示し、従って「生、死、愛」は当然扱われるものであることを示した。また、人生を歩むにあたり、「価値観」や「人間関係」は実人生でも重要であるが、このことはシェイクスピアでも同様であることを説明した。また、愛がプラスの情とすれが、マイナスの情は憎しみとなり、愛憎はまさに愛情の両面性(ambivalence)となる。

当然のことであるが、15回の授業では取り扱う内容には限界もあるが、1回の授業ですべてがカバーできるわけでもなく、数回にわたりながらシェイクスピアや『リア王』について触れることは学生にとっても授業の意図が記憶に残り易いのではなかと考えられる。

2. 学生の知っている『リア王』

授業科目「英米文学史」で『リア王』を取り上げる際、学生には『リア王』についてどの程度知っているのかを口頭で質問し、黒板等知っ

いることを列挙してもらおうと次のようなことになった。

- 1 『リア王』という作品の名前だけは知っている。3人の娘が登場するということを知っている学生は30名中2名であった。
- 2 舞台あるいは映像を観たことがあるものはいなかった。

『ロミオとジュリエット』の時もそうであったが、特に演劇好き、文学好きという学生もいないわけではないが、ほとんどの学生は『リア王』という作品名以外は知らない状態であった。このことはある程度想定していた。

3 財産分与の映像比較と学生の反応

前述の「3 学生の知っている『リア王』」の通り、学生が『リア王』をほとんど知らないことが明らかになった。このことについては想定していた。『ロミオとジュリエット』の場合にはあまり説明等は不要であろうが、今回の場合には次のようなプロセスを経た。

1 リア王と3人の娘の紹介と現状

リア王 老王。はっきりした年齢は不詳だが70歳を越えた年齢。

ゴネリル 長女。夫はオールバニー公。

リーガン 次女。夫はコンフォール公。

コーディリア 三女。独身。バーガンディ公とフランス王から求婚中。

- 2 1幕1場の財産分与（所領分与）の場面の原文と日本語を紹介。筆者が日本語の台詞を朗読。
- 3 1幕1場の財産分与（所領分与）の場面に相当する4つ映像の紹介。映像を観たあとリアクションペーパーに記載。

新井潤美「表象文化（映画）を教える—『アダプテーション』というコンセプト」（2017）では「英文学教育において、映像を有効に使う可能性」⁽³⁾について論じている。その中で Elaine Showalter. *Teaching Literature* (2003)に言及しながら、次のように述べている。

映画やドラマのような視聴覚教材を使った場合、ただ漫然と見せていてはダメだということなのである。これは言うまでもないことかもしれないが、映像を見せる前に、こちらとしては明確な指示をしたつもりでも、学生にとって初めて見る映像である場合は指示が今ひとつ伝わらないことが多い。⁽⁴⁾

こうした状況もあり、場面の切り取りであるが、その場面の台詞を事前に知ることでもまずイメージをもち、さらに複数の映像により想像力をさらに高めさせた。4つの映像について以下の通りの順番でそれぞれ観せた。

- 1 アンドリュー・マカラ監督『リア王』（アメリカ、1953）
- 2 グリゴリ・コジンチェフ監督『リア王』（ソ連、1970）
- 3 黒澤明監督『乱』（日本、フラン、1985）
- 4 雨宮望演出『王様の心臓～リア王より～』（TVドラマ、2007）





上記の4つの映像を提示した。第1のアンドリュー・マカラ監督『リア王』(アメリカ、1953)は主演がオーソン・ウェルズ (Orson Wells, 1915-1985)、グリゴリ・コジンチェフ監督『リア王』(ソ連、1970)は台詞が英語ではないが、主演のユリー・ヤルヴェト (Yuri Yarvet) の演技力と雰囲気から十分にその意図を掴むことができる。他の2本は日本人製作のもので、そのうちの1つは黒澤明監督『乱』(日本、フラン、1985)は主演が仲代達矢 (b.1932)、日本の戦国時代に翻案した映画である。最後は井上由美子脚本・雨宮望演出『王様の心臓〜リア王より〜』(TVドラマ、2007)で、主演が西田敏行で、現代日本に翻案したものである。かなり日常生活的な内容になっている。『リア王』自体をよく知らない学生に見せるため、演技等がかなりはっきりしているものを選択した。

それぞれの場面の映像を1～4の順に観てもらったあとにリアクションペーパーで回答してもらった。(リアクションペーパー実施は2018年11月20日) その問いは次の通りである。

(1) 『リア王』の冒頭(リア王と三姉妹の会話)部分の映像を観ましたが、あなたはどの映像が最もしっくりと来ましたか。自分なりの順位をつけなさい。

順位は1～4で必ずつけてもらった。また、(2)として選んだ理由を自由記述で回答してもらった。

	1	2	3	4	
マカラ監督	6	5	9	10	30
コジンチェフ監督	14	5	8	5	30
黒澤明監督	3	10	5	10	30
雨宮望演出	7	10	8	5	30
	30	30	30	30	

筆者の予想ではロシア語のものは敬遠され、マカラ監督か雨宮望演出の映像がかなり高い評価を得るのではないかと考えていたが、その予想は大きく外れた。では学生がコジンチェフ監督のものを選んだ理由をいくつか紹介しておきたい。

- ・父が怒った時の演技が一番迫力があつた。
- ・王の感情の変化が一番わかりやすかつたのがグリゴリ・コジンチェフ監督のリア王だつた。王が一番愛していた三女への感情が少しずつ悲しみから怒りに変わっていき、最後に怒りが爆発していたのがしっくりきた。
- ・表情があり、迫真の演技のように思えた。
- ・父の気迫が最も感じられました。多くいる人物の表情の変化だけでなく、火が多くあつたため、情景描写を最も感じられました。特に姉から次女へと番が変わるとき、鐘の音が鳴っていたのは、内容転換に最も有効的のように思えました。
- ・父親が期待を裏切られて怒りと悲しみがまざっているのが良くわかる。

上記の中で下線の理由、「悲しみから怒りに変わっていき」という部分は人間の感情の起伏の変化に注目しており非常に優れた指摘であると思える。学生は字幕と映像から判断したことになるが、リア王の役者の演技によりこの作品を選んだことが主なる理由である。この意味では筆者の意図通りなのである。学生が迷っていたのはマカラ監督のものとこのコジンチェフ監督の映画をどちらを1位にするかということだ。ちなみにマカラ監督のリア王を主演したオーソン・ウェルズはコーディリアの言葉に激怒し、地図を引き裂く演技であった。もちろん、このアクションは原作の台詞には記載されていないため、演出である。

意外であったのは、「アレンジがわかりやすい」が多かった雨宮望演出の映像である。反対に「アレンジし過ぎ」で少なかったのが黒澤明監督『乱』であった。『ロミオとジュリエット』と違い、『リア王』の財産分与の場面は現実的な問題であり、日本が超少子高齢社会であるという背景を考える時、単なる演劇として片づけられない内容であることも理由の一つかもしれない。

リアクションペーパーでは3つの質問をしていた。最後の問いは以下の通りである。

3女（末娘）が最も父親を思っているように思えるが、なぜ、あのような態度を取ったのでしょうか？

上記の問いにする学生の回答をいくつか紹介しておきたい。なお、カッコ内は筆者が補った。

- ・(姉たちが) 父にいい顔して財産を全部自分のものにしようとしたから。
- ・2人の姉のような取り繕った言葉を言うより、自分の本心を伝えようと考えたから。父のことを本当に思うからこそ態度だと思う。

・愛しているからこそその気持ちを誇張することなく伝えたかった。真実を伝えることが父に対する愛だと思ったから。

・長女、次女は財産のために口だけになっていると思うし、三女が現実的に物事を考えているように見えた。本当に思っていることを言っただけなのに三女が一番悪い態度に見えるのは長女、次女が口先だけで良いことを言っているからだと思う。

・姉達の様になぞをついてまで財を得ようとするのは父に無礼だと思ったから。

・父親を一番に思っているからこそ姉達のうわべの言葉が並べただけの発言をしなくて、本心を読みとって欲しかっただんと思う。「あの瞬間だけの発言だけでは判別しないでほしい」という思いが込められているんじゃないかと思いました。

学生のコメント読む限り、リア王とコーディリアのやりとりの背景にあるものを見事に掴んでいることがわかる。もちろん、全員の学生がこのようなコメントを寄せているわけではない。重要なことは“Nothing”（何もない）背後には言葉では言い尽くせないたくさんのことがあるのだ。このことはコーディリア自身も次のように述べている。

The poor Cordelia!

And yet not so; since I am sure my love's

More ponderous than my tongue. (Act I. sce.i. 75-77)

単にテキストを読むだけでは伝わりにくいものも、セリフ（字幕）＋役者の演技により、舞台ではないが映像により理解したことになる。

4 時代を越えるシェイクスピア

シェイクスピアの作品には原典あるいは材源があることが知られている。筆者はシェイクスピアの講義の際、「シェイクスピアは偉大な芸術家」と表現せず、「シェイクスピアは偉大なアレンジャー」と表現することが多い。もちろん「偉大なアレンジャー」は「偉大な芸術家」であることに間違いはない。

今回は材源のことよりももっと注目したいことは、シェイクスピアが扱ったその内容である。「リア王の3人の娘への財産分与」の部分である。現在の日本が超高齢化社会を迎え、人口が減っていることは周知の通りだ。これに伴い兄弟姉妹も少なくなり、親の介護も大きな社会問題となっている。そしてもうひとつの問題が財産分与である。お金に関するトラブルは肉親であろうと友人であろうと関係なく発生する。シェイクスピアは『ハムレット』でも友人間でのお金の貸し借りはするなどポローニウスが息子のレアティーズに忠告している。

兩宮望演出の『王様の心臓』は現代日本を舞台にした翻案物である。学生からの意見として、財産分与を王国にすると他人事のように思えたが、TVドラマ化されて会社や店を継ぐと言う設定になると急に現実的なり、身近なテーマに感じられたというのだ。黒澤明監督『乱』も日本への翻案だが、戦国時代ということから、どこか冷めて見てしまうという。日本文化を全面に出すと言う点では外国人が好むのではないかというコメントであった。シェイクスピアのテーマは「外見と実体」(Appearance and Reality)を取り上げるものが多く、コーディリアの態度もまたこのテーマに当てはまるものだ。シェイクスピアが時代や文化を越え、今日まで演劇から活字へ、バレエ、オペラ、ミュージカルへ、さらには映像へと多様化しているのは、時代や文化に影響を受けにくいテーマを扱っているからこそ、一過性に留まらない人気を博しているのである。ベン・ジョソン (Ben Jonson, 1572-1637) も “He was not of an age, but for all time!”⁽⁵⁾ とまさに述べている通りである。
(He=Shakespeare)

芸術はアリストテレス (Aristotélēs, 384–322 BC) の『詩学』(*Poetics*)によれば「ミメシス」(模倣)であると言われる。では何をミメシスしているのだろうか。それは演劇や文学のテーマとしては「人生」と言ってもいいだろう。人生には「生死」「愛憎」は外せないところだ。現実問題として人生の終焉には様々なまさにドラマがある。王国であれば王位継承やこれに伴う領土問題が発生し、一般家庭では財産分与の問題が持ち上がる。シェイクスピアを高尚なものとしてしまえば、自分には関係のないものとなるが、そこに描写されている人間ドラマを日常生活の中で考えた時、身近なものとして捉えることができる。芸術を通しての人生の疑似体験を行うことができるのだ。

エピローグ

筆者は「活字離れ=文学離れ」⁽⁶⁾ではないと以前にも主張したが、この財産分与をめぐる場面はまさに象徴的であった。とかく文学を専門とする教員はその文学作品全体について学生にわかってもらいたいと思いがちである。しかし、考え方を変えれば、部分的なところに興味が湧けば、全体を知りたくなることも多い。ゲームなども第1ステージを突破すれば、次に進みたくなる。そして最後はどうなっているのかを知りたくなるものだ。授業科目「英米文学史」ではまさにこうしたことも狙いの一つである。この授業科目から実際に舞台を観たり、本を読んだりまではないまでも、映像なら観てみようかと思ってくれば、大きな進歩である。疑似体験としての文学・演劇は人生を豊かにするひとつの方法ではないだろうか。

テキスト

Peter Alexander, editor. *William Shakespeare: The Complete Works*

(London and Glasgow: Collins, 1992).

注

- (1) 『『英語文学』の授業展開に関する一考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—』（『新教育課程研究』第9号、武蔵野教育研究会、2019年7月）で取り上げた。
- (2) 「ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞スピーチ 2016/12/11 15:47」（<http://www.nikkei.com/article/DGXMZO10538020R11C16A2I00000/>（2017年1月4日アクセス）
- (3) 新井潤美「表象文化（映画）を教える—『アダプテーション』というコンセプト」（日本英文学会編『教室の英文学』研究社、2017年5月）、p.123.
- (4) Ibid., p.124.
- (5) “Preface to The First Folio (1623)”（<http://www.shakespeare-online.com/biography/firstfolio.html>）(2019年4月10日アクセス)
- (6) 佐々木隆「『英語文学』の授業展開に関する一考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」、p.11.

【キーワード】 英語文学、リアクションペーパー、教授法、『リア王』